令和元年度　道徳学習指導研究委員会

一　テーマ

「子ども達が道徳的な価値を深め合う指導はどうあったらよいか。」
　～「特別の教科　道徳」の指導とその評価のあり方～

二　テーマ設定の理由

児童生徒のよりよく生きたいという願いをもとに、豊かな道徳性を育て、道徳的価値の自覚を深めることにより、自主的に夢や希望をもって明日を拓いていけるような、より高まった道徳的実践力を培うことを目的として、本テーマを設定した。また、今年度から完全実施される道徳の指導と評価のあり方についてとし、研究していきたいと考えサブテーマを設定した。

三　研究の経過

本研究会では、昨年度の研究をさらに深めるため、これまでの研究テーマを継承し、道徳的な価値の自覚を深めるための指導のあり方について研究を重ねてきた。また、今年度から中学校では「特別の教科道徳」が実施される。道徳の教科化に向けて、「考える道徳」「議論する道徳」をどのように実践していけばよいか、また、どのように評価したらよいか研究してきた。
「特別の教科道徳」の目標や指導のポイントとして、次の点が挙げられる。

・自己を見つめること
　これまでの自分の経験や、そのときの考え方、感じ方と照らし合わせながら、さらに考えを深めること、自分自身と向き合う・自分事として考えること。

・物事を多面的・多角的に考えること
　物事を一面的に捉えるのではなく、児童自らが道徳的価値の理解を基に考え、様々な視点から物事を理解し、主体的に学習に取り組むようにすること。

・自己の生き方についての考えを深めること
　児童が道徳的価値に関わる事象を自分自身の問題として受け止められるようにする。他者の多様な考え方や感じ方に触れることで、身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深くみつめることができるようにすること。

などが挙げられる。そこで本年度はこれらを踏まえて、東信教育事務所学校教育課指導主事羽生篤史先生をお招きし、「考え議論する道徳」の授業やその評価のあり方について研究した。教育課程研究協議会（会場：東部中学校）の午後の部では先生方とともに、教科書に載っている小中共有の教材を使い、教材研究を行うことで研修を深めることができた。

四　研究の内容

1　研究の視点および研究の方法

研究の視点

（1）「考える道徳」「議論する道徳」の指導の工夫と評価のあり方
（2）　児童生徒の心を揺さぶるような資料の選定・資料提示の工夫と評価のあり方
（3）　児童生徒の考えを深めるための発問や板書の工夫と評価のあり方

研究の方法

（1）委員会に東信教育事務所羽生篤史指導主事にきていただき、「特別の教科道徳」について研修を深めた。
（2）教育課程研究協議会午後の部において、授業作りの研修会を行った。
（3）道徳教育研究協議会に参加した。
（4）研究の成果として実践内容を「研究のまとめ」（Web ページ）に掲載する。

本年度の委員会の日程及び内容

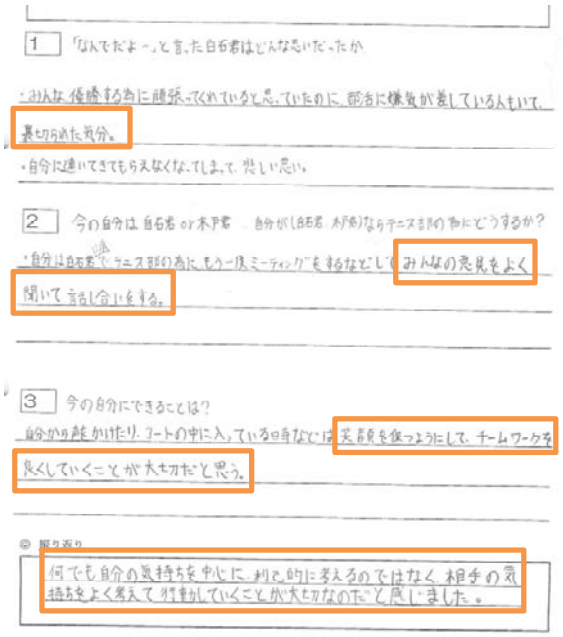
第１回　　５月　７日（火）　総委員会…推進計画と役割分担（会館）
第２回　　６月１８日（月）　羽生指導主事を迎えての道徳教材研究（和小学校）
第３回　　７月１０日（水）　教育課程研究協議会事前授業参観（東部中学校）
第４回　　７月２３日（火）　教育課程に向けての午後の研究会の持ち方
　　協議事前打ち合わせ（会館）
第５回　　８月２９日（木）　教育課程に向けての事前打ち合わせ（会館）
第６回　　９月　５日（木）　教育課程研究協議会（東部中学校）
第７回　１１月２８日（木）　総委員会…「研究のまとめ」作成に向けての準備（会館）

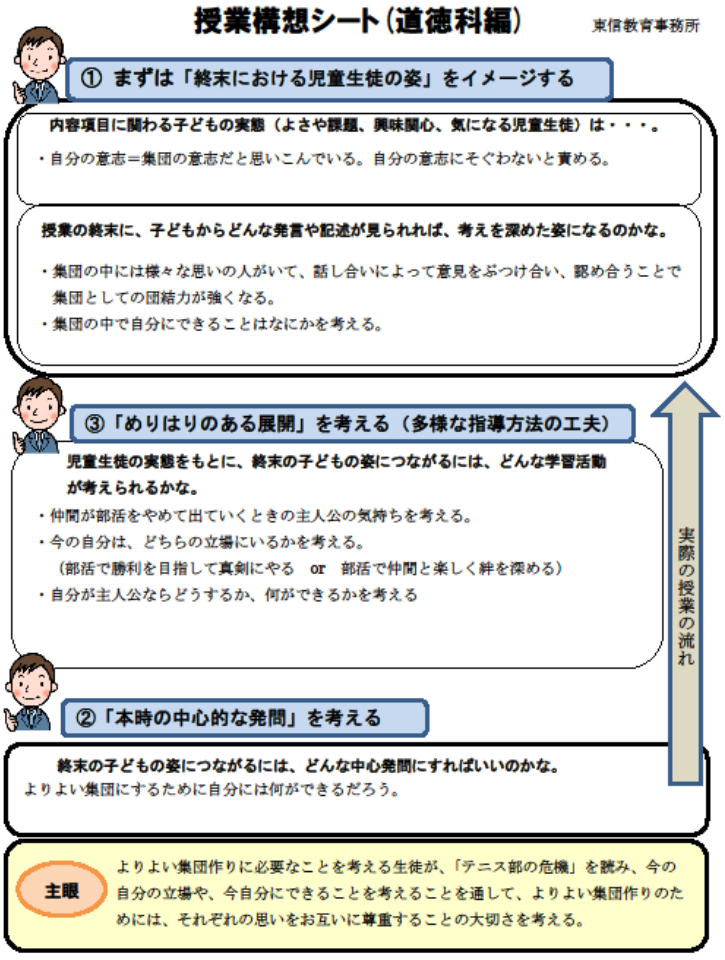
２　指導委員による実践

実践①　　第二中学校　倉科宗和

教科書教材「テニス部の危機」

【生徒のワークシートの一部】





□で囲まれた部分の記述をもとにした評価

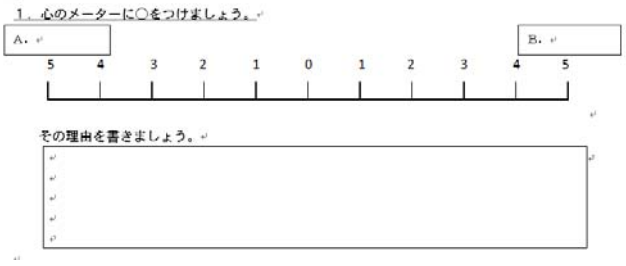
教科書教材「テニス部の危機」では、主人公に気持ちに寄り添い、やる気のない態度をとる仲間の態度に裏切られたような思いをもちましたが、今の自分の立場や自分にできることを友と考えることを通して、自分の気持ちを中心に考えるのではなく、相手の気持ちをよく考えて行動することがよりよい集団作りで大切だという考えをもちました。

実践②　　菅平小学校　北村　信

【「心のメーター」を使って考えを可視化する授業の実践と、ワークシートを活用した評価】

「心のメーター」とは（活用方法と活用理由）

A、B、２つの反対の考え方がある場面で、児童一人一人が自分の考えを０～５のどの位置にあるかに印をつける。個人のワークシートに記入後には、黒板にマグネットで「心のメーター」を示してクラス全体の意見を可視化し、共有する手段として活用している。意見が可視化されることで、自分と正反対の考えがあることに気付いたり、同じ結論を出すにしても自分とは考えが異なると分かったりできる手段であると考えている。ただ単にメーターに表すだけでなく、なぜそこに表したのかという理由を大切にし、その後の議論を活性化させることにつなげていきたい。



児童のワークシートの枠

ワークシートを活用した評価について

道徳の授業を行うときには、毎回ワークシートを活用している。授業後はファイルに綴じて保管し、児童が自らこれまでの活動を振り返ることができるようにしている。また、毎回ワークシートの記載をチェックし、授業での児童の変容や、考えの深まりなどを確認している。学期末には、そのワークシートの内容や授業の様子から、児童が「より多面的・多角的な見方へと発展しているか」や「道徳的諸価値の理解を自分事として深めているか」という視点で、道徳科の評価を行っている。なお、その際には、ワークシートだけでの判断にならないように留意している。

心のメーターを使った授業の実践例

【学年】小学６年

【教材名】「手品師」（東京書籍　新しい道徳６）

【内容項目】正直、誠実

【本時の主眼】自分の夢をとるか、それとも１人との約束を守るために諦めるかという葛藤場面に直面する主人公の気持ちを考え、議論することを通して、「正直に、誠実に生きる」とは何かを自分事として考え、いつでも正直に、誠実に、明るい心で生活しようとする心情を育てる。

【授業の流れ】

○導入の発問：正直に生きる、誠実に生きるとは何だろう？

○資料との出合い（朗読 CD を活用）

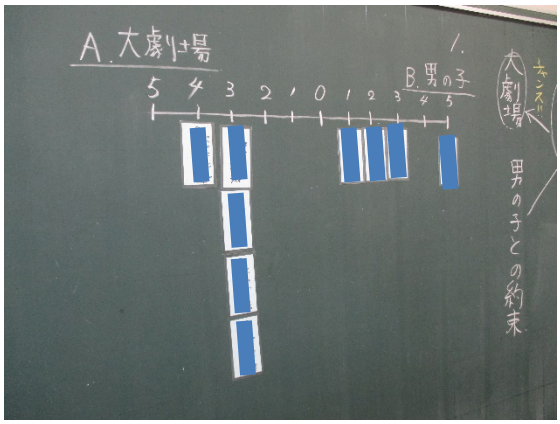
○発問①：あなたが手品師だったら、大劇場、男の子、どちらを選ぶ？（心のメーターに表す）

◎発問②（中心発問）：手品師が友人からの電話を受けた時、手品師はどんなことを考えたと思う？

○発問①についての自分の考えを、再度心のメーターに表す。

○発問③　手品師は後悔していると思う？

○感想を記入し、全体で共有する。



【本時の授業での心のメーター】

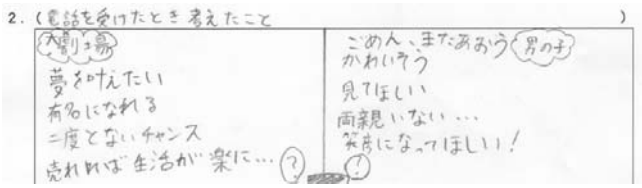
発問①「あなたが手品師だったら、大劇場、男の子、どちらを選ぶ？」に対し、児童９名のうち５人が「A　大劇場に行く」を選び、４人が「B　男の子の所に行く」を選ぶという結果になった。これを見ながらそれぞれの考えを伝え合い、議論を進めた。

議論の後、自分の意見が変わった児童にはマグネットを貼り替える時間をとった。今回は２名の児童が貼り直した。「A の４」から「A の３」へ移動させた児童は、「大劇場に行くという考えは変わらないけど、友達の意見を聞きながら、だんだん男の子がかわいそうという気持ちが強くなった。だから少し動かした」と意見を発表した。「B の３」から「B の５」へと移動させた児童は「初めは大劇場に行くことも悩んでいたけれど、○○さんの『約束は大切』という意見を聞いて確かにそうだと思ったから５にした」と意見を発表した。いずれも、友達の意見を聞きながら自分の考えを深め、自分自身の微妙な考え方の変化を「心のメーター」で示しながら周りの児童に伝えることができた。

心のメーターに表すことで、一人一人の考え方の違いが可視化され、多様な考え方があることを知れたことで議論が深まったのではないかと感じている。そういったことから「心のメーター」を活用したことは、本時のねらいに迫る手段として、一定の効果があったと考えられる。

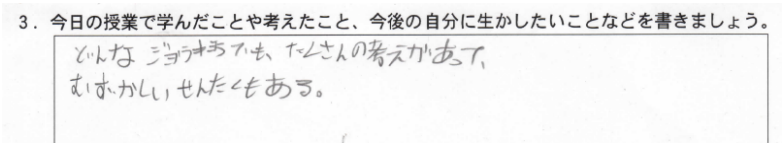
<u>上記授業での児童のワークシートの記載と、それを活用した評価例</u>

・***A さん***　※本時のワークシートおよび授業の様子で評価



「手品師」の学習では、自分の夢をとるか、それとも１人との約束を守るために諦めるかと葛藤する主人公の気持ちを考え、「その意見も分かる」と友達の意見に耳を傾けつつ、自分なりの考えをもち、発表していました。

・***B さん***　※本時だけでなく、その他の時間のワークシートや授業の様子も含めて評価



※他の題材のワークシートにも、同様に他の友達の意見を聞いて「色々な考えがある」「その意見もよくわかる」などの記載が見られる。

主題に対する主人公の気持ちを真剣に考えてワークシートにたくさん記入したり、友達の意見に耳を傾けて共感したりしながら、人には色々な考え方があり、すぐには決められない難しい選択もあるのだと考えを深めていました。

実践③　東御市立東部中学校　加藤昌治

一　研究テーマについて

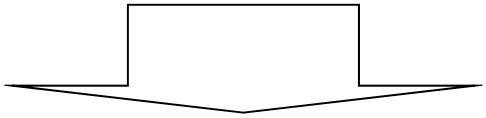
研究テーマ設定の理由

全校研究テーマ

生徒が自分の考えをもち、グループ追究・全体追究などの意見交流を通して、考えの
深まりが実感できる授業づくり

本校生徒の実態

○明るく笑顔であいさつをすることができる。
○授業中は落ち着いて取り組み、やるべき事に対して前向きに努力できる生徒が多い。
○自分の考えをもち、自分の言葉でまとめることができる生徒が多い。
○同じ目的を持った仲間たちと協力して成し遂げようと努力することができる。
●話し合いの場面で、発言する生徒が限られており、失敗を恐れたりするあまり分かっていても挙手することができない生徒がいる。
●仲間を思いやる気持ちや配慮ある言葉がけをすることが苦手な生徒がいる。
●価値観の違う相手に対して、受け入れることが難しい生徒がいる。



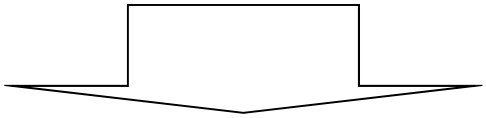
道徳の授業で願う姿

『道徳科の目標』

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

【羽生篤史先生から示唆されたこと】

・教科書通りに 35 時間やってみることが大事。
・「きれいごと」で済ませない、アレンジのあり方。どんな切り口で切り込むか。
・終末で悩みをもてたり、語れたりすればよい。「こうなってほしい」とならなくても良い。
・普段言えない自分だが、登場人物に語らせることができる。自分に置き換えて言わせる。
・発問、問い返しが深い学びにつながる。
・評価については、自分に寄せて考えることができたかどうか。



道徳研究テーマ

仲間との対話を通して、多面的、多角的な見方を身につけ、自分の問題として道徳的価値をとらえる指導のあり方　～日常的な道徳の授業を通して～

二　研究の経過

道徳科学習指導案

3年6組　男子17名　女子18名　合計36名
担任　加藤昌治

1　主題名　　他者と共に生きる社会を目指して【内容項目Ｂ（９）相互理解、寛容】
2　教材名　　「アイツとオレ」(中学道徳③　きみが いちばん ひかるとき：光村図書)
3　主題設定の理由

3年6組の生徒は、自分たちが楽しむことに夢中になってしまうために、時間のけじめがつけられずに遅くなってしまったり、仲間意識を強めて常に一緒に行動しないと不安になってしまう集団がある一方で、相手からどう見られているかが気になるあまり、少しの言動でも心配の種になり、「自分が周囲からどう見られているか」常に気にしながら生活をする生徒も見られる。

本教材は、対照的な性格の 2 人の生徒の対話を親しみやすい漫画で読むことができ、他者と相互に理解し合うことの必要性を考えさせ、高め合おうとする判断力を育てることができる教材である。自分のことだけでなく、周囲のことも配慮しながら行動していくことは、社会生活の上で欠かせない大切なことである。自分が気づかないうちに他者の心に深い傷をつけてしまうことですらある。相手の良さを認め合い、さらに一歩踏み込んで間違いを批正することが出来る姿が見られるようになることを願い、本主題を設定した。

4　本時の位置（1時間扱い）
5　本時案
（1）　主眼

「アイツとオレ」を読んで、登場人物に共感し、自分にも似たような経験があることを感じた生徒が、自分が「オレ」だったらどんな行動を取るかを考え合う活動を通して、自分よりも優れているかもしれない存在を認めたくないという気持ちをもちがちであることに気づかせて、その上で互いの違いや、良い点を認め合ったり、互いの思いを伝え合ったりすることが大切であることを実感させ、他を慮る心と態度を育てる。

（2）　展開

	学習活動(時間)	予想される生徒の反応	指導上の留意点（◆評価）
導入	○自分はまわりの人から分かってもらえている」と思いますか。ネームマグネットを「心のものさし」に貼りましょう。（5）	○同じ部活動の仲間は、励ましの声をくれたりするから、分かってもらえている。 △両親は、自分の夢を応援してくれている。でも、本当に理解してくれているかは分からない。 ●あまり話をしない人は、自分のことを理解してくれていないと思う。	・日常のいろいろな場面を振り返るようにし、思い起こさせる。 ・反応が鈍いときは、教師が自分の例を挙げる。 ・「心のものさし」に貼る際は、迷っている生徒にどちらでもないという選択があることを伝える。
展			

学びのテーマ：人と分かり合うことは、なぜ必要なのだろう

開	**「アイツ」と「オレ」を読んで考える** ○「オレ」はどうして「アイツ」のことが気に入らないのでしょう。(15) ○「アイツ」の言葉の後に、「アイツ」と「オレ」が話し合うとしたら、どんな会話になるでしょう。(5) ○グループで「アイツ」役と「オレ」役になって、役割演技をしてみましょう。(5) ○全体の前で1組、発表してください。(10) ○「自分はまわりの人のことを分かっている」と思いますか。「心のものさし」にネームマグネットを貼りましょう。(5)	・大人っぽい態度が嫌。 ・自分と同じくらいなのに、余裕のある態度が気に入らない。 ・正論を振りかざしている感じが気に入らない。 ・「おまえのそういう決めつけた話し方が気に入らないんだよ!!」 ・「おまえがおれと同じと思ってみるなんて、思ってもみなかった。もう一度自分の行動を考えてみるよ。」 ・考えてみると、分かっているつもりだったけど、分かっていなかったのかもしれない。 ・これまであまりそこまで深く考えていなかったな。分かっているつもりだったけれど。	・自由に発言させる。 ・「正論」という意見が出た場合は、具体的に「正論」とはどんなことか、切り返して問う。 ・発問に「言い返す」という言葉を使うと「オレ」の言葉が対抗する方向だけになりやすいので、ここでは発問を「話し合う」とする。 ・演じたときの気持ちや、役割演技を見て、どう思ったかを出し合い、グループで共有する。 ・自分たちとの違いをよく見るように指示する。 ・自分にとっての「アイツ」をイメージして考えるように伝える。 ・迷ったら、どちらとも言えないという選択があることを伝える。
終末	○感想を書きましょう(5)	・良いところだけでなく、良くないところも伝えることが大事なんだと思いました。 ・分かり合うことは難しいけれど、お互いのことを知る上でとても大切なのだと思いました。	・役割演技を通して感じたことなど、授業の感想を書くように促す。 **◆良い点を認め合ったり互いの思いを伝え合うことの大切さを感じ取ることができたか。**

三　研究のまとめ

（1）中心発問の吟味

「アイツとオレ」において、最後の場面、アイツの言葉に対して、言葉が出てこなかったオレ。その時にオレはとんな言葉をかけたらいいのか、その言葉に対してのアイツの返事を考える場面で、

「アイツ」の言葉の後に、「アイツ」と「オレ」が話し合うとしたら、どんな会話になるでしょう

と問いかけたが、書き出すまでに時間を要する生徒が見られた。確かに迷う内容なので、じっくり考えていた面もあると思うが、問いに対しての書き方が分からなかった生徒がいたように感じた。

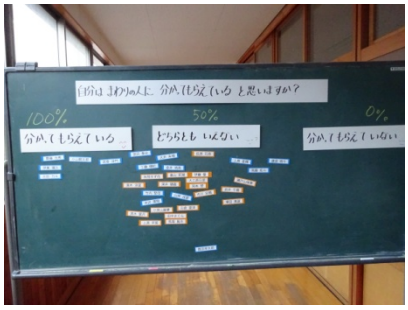
・「オレ」が「アイツ」に、自分はこれからどうしていけばよいのかたずねに行く。（K生）
・「アイツ」が一方的に意見や思いを伝えて、「オレ」はあまり反ろんできずに、ウザイとかの言葉しかでてこないと思う。オレのほうは話しずらいと思う。（K生）
・オレ「言いたいことはなんとなくわかった。」アイツ「本当？」オレ「これから気をつけるようにする」みたいになると思う。（S生）

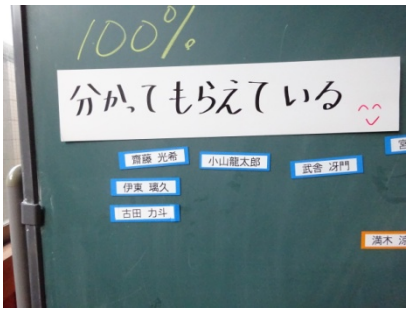
上記のように、さまざまな書き方が出てきていた。発問の仕方をさらに吟味すれば違ったかもしれない。

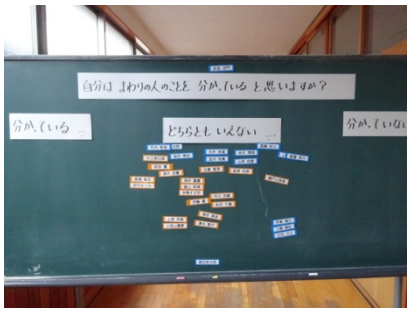
「アイツ」の言葉の後に、「オレ」は「アイツ」に何と言うでしょう。「アイツ」は何と答えるでしょう。

のようにすれば、より具体的になり、書きやすくなったと思われる。

（2）自他の考えの可視化







「心のものさし」…一人ひとりの考えの変容が可視化される

導入で、「自分は周りの人から分かってもらえていると思いますか」と問い、分かってもらえている・分かってもらえていない・どちらともいえない　を１００％で考え、どこに自分がいるかを小黒板にネームマグネットを貼る。これにより自分の考えが明らかになるとともに、他の生徒にとっても相手の考えがわかりやすくなった。その上で、「分かってもらえている」の１００％に貼った生徒にどうしてそう思うのか、問いかけた。「仲の良い友達には何でも分かってもらえている」「何となく」といった答えが得られた。

授業の後半、感想記入の前に、「自分はまわりの人のことを分かっていると思いますか」と問い、同じようにネームマグネットを貼った。「どちらともいえない」に集中した。授業の中で、分かっているようでも分かっていない部分もあるという思いで貼った生徒が多かったことが、道徳ノートの感想で分かった。

「心のものさし」を取り入れることで、仲間やクラス全体のことが分かる、自分のことを考えるという点で効果があったと考えられる。その一方で、新たな道徳的価値を獲得することまではいかなかったという印象である。また、最初と最後に２回取るのであれば、同じ内容にして１時間の変容を見るのも良いと思われる。

（3）自分の問題として道徳的価値をとらえるための「役割演技」

仲間の考えについて、役割演技をすることで、より理解が深まったり、見方や考え方が深まったりする意味において有効な手立てであった。生徒も他のグループの発表を見ながら工夫をし、多くの視点、考え方が集まった。

役割演技の中で出てきた考え方を分類して掲示し、授業者が短い言葉で整理して価値づけをすることは、多面的に考える上で有効であった。

３ 「道徳の教科化」にあたっての本校の取り組み

（１）学習の積み重ね・振り返りが可能な「私の道徳ノート」の導入

昨年度までは、授業ごとに学習カードを作成し、考えをまとめたり感想を書いたりする形式を取り、「道徳ファイル」で保管するようにしていた。今年度から道徳の教科化に伴い、教科書を活用した道徳授業を継続して行っていく上で、毎時間の学習カード作成・管理は大きな負担になると考え、学校全体で「私の道徳ノート」を一括購入し、全ての授業で活用することにした。教材の題名や学習の日、その授業のねらいを各自で書くことで、その授業における身に付けたい道徳的価値を生徒自身が確認できる良さがある。さらに自分の考えや仲間の考えをまとめ、授業全体の感想をまとめ、最後に振り返りを記入する。生徒自身が学習の内容を容易に振り返ることができるとともに、教師側も管理がしやすくなると考えた。この「私の道徳ノート」があることにより、道徳の授業が日常化され、年間３５時間の授業確保にも一役買ってくれるものと期待している。

（２）学年ごと輪番で授業構想の提案

年間指導計画に沿った授業に向けて、学年ごとに先生方が輪番で教科書に基づいて授業展開を構想し、学年会の折に略式指導案や学習カード等の提案を行う。道徳の授業は授業スライドで学年ごと同じ時間に入れておき、どのクラスも同じ内容の道徳授業が行えるようにする。

一学期を終えての現状は、学年会で道徳担当の先生にリードしてもらっているが、実際に輪番で授業構想の提案を行うところまではできていない。同じ時間に同じ内容の授業を行うことはできている学年もある。今後可能な限り実現に向けて詰めていきたい。

（３）個人内で成長の過程が見られ、保護者にもわかりやすい評価のあり方

年間指導計画をもとに、３５時間の道徳の授業を進めていく中で、全ての内容項目についての評価を反映させて通知票や指導要録に記載することは、現実としては難しい。そこで、本校では以下のように評価について研究を進めている。

① ２つある視点を評価に反映させる

視点１

他者の考え方や議論に触れ、自律的に思考する中で、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか

・道徳的な問題に対する判断の根拠やその時の心情を、さまざまな視点からとらえ、考えようとしている点
・自分の考えをとらえ直したり、自分と違う意見や立場を理解したりしようとしている点
・複数の道徳的価値の対立が生じる場面において、取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしている点

視点２

多面的・多角的な思考の中で、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

・読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりにイメージして理解しようとしている点
・自らの生活や考えを見直している点
・道徳的な問題に対して自己の取りうる行動を仲間と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに

深めている点
・道徳的価値を実現することの難しさを自分事としてとらえ、考えようとしている点

② 学年ごとに評価に反映させる題材をピックアップして、成長が見られるような記述で評価を行う。

全ての題材について授業で扱い、その全ての学習カードを評価に反映させるとなると、莫大な労力や時間を要する。そこで、同じ内容項目の中で、比較できる内容のものを学年ごとに３ペア程度ピックアップし、その授業中の生徒の様子や学習カードの記述などから、生徒の成長が見られるように通知票や指導要録の評価の記載に反映させる。

評価は個人内評価で行う。評価に生徒を合わせていくと無理が出てくる。生徒の学びの様相・変化から評価を考えていくことで、個人内評価になっていく。

なお、本校では道徳の評価は二学期末のみ行い、個人内での変化や成長が見られるような道徳ノートの記述や授業中の変化・発言等の様子から授業者（主に学級担任）が記述する。指導要録の内容も通知票の記載に準拠させる方向で行う。

四　研究の課題

・一年間の道徳の授業数を３５時間に定め実施するように努めてきたが、行事との兼ね合いがあり、来年度もこのバランスを保ちながら３５時間の授業時数を確保することが大きな課題となる。
・道徳的価値を多岐に渡って取り扱ってきたが、通知表や指導要録に記載する内容において、文字数的にどうしても制約が出てくるので、授業ノートや授業の様子から精選して記入することにした。授業者の主観が含まれてしまうことは仕方ないか？

実践④　南小学校　山﨑豪介

１　主題名　ほのぼのテスト　　内容項目　B－(11)相互理解・寛容
　　資料名　「ほのぼのテスト」(『小学どうとく　心つないで　５』教育出版)

２　本時の主眼

相手の考えや立場を理解できなかったり、受け入れられないで伝え方や態度を誤ってしまったりすることがある子どもたちが、資料「ほのぼのテスト」を読んで、バスの車掌が運転手に耳打ちをする場面で、自分が車掌や運転手だったらどんな対応をとるかを考え、「心のものさし」を使って意見交流することを通して、自分と異なる意見や立場も尊重しながら、相手の気持ちや立場を考えてよりよい関わり方ができることのよさを感得することができる。

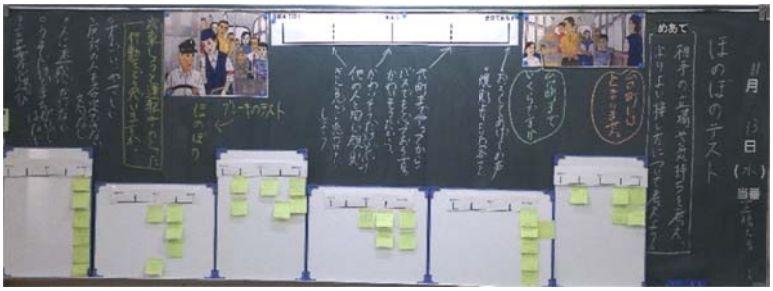
３　展開

（１）資料前半を読む
（２）【発問①】席をゆずられたおじいさんが、台町で降りられないことを知ったときバスの乗客はどんな気持ちだったでしょう。
（３）「心のものさし」を使った意見交換
（４）【発問②】車掌さんは運転手さんにどんなことを耳打ちしたのでしょうか。
（５）資料後半を読む
（６）【中心発問】車掌さんと運転手さんのとった行動をあなたはどう思いますか。
（７）ふり返り

４　考察

（１）構造的な板書と「心のものさし」

構造的な板書と「心のものさし」により、自分の考えを書くのが苦手な子も、視覚的に考えていくことができた。白黒をはっきりつけられないような場面でも有効であると考えられる。友だちの考えを視覚的に理解しながら自分の考えを広げ、自分と比較しながら考えを深めていくことができた。



（２）子どもの思考・記述とその評価文例

①A 児

【発問②】おじいさんはわざとまちがえたわけではないし、１人だから…

【中心発問】「おじいさんを降ろす」と言わないことで、降ろしてはいけないと思っている人にも迷惑がかからないやり方。だれも文句がない言葉の選び方が上手だと思った。

評価文例「相互理解・寛容について、単なる優しさから、様々な立場の人を尊重することの大切さに考えを深めることができました。」

②B 児

【中心発問】うそをついてまでおじいさんを降ろしてあげたので、親切で気配りのできる車掌さんだなぁと思いました。

【振り返り】こういう選択をしづらい場面はこれから大人になるとたくさんありますが、ぼくはそうやって親切にできる大人になりたいです。

評価文例「相互理解・寛容について、乗客のことを考えて行動した車掌さんの立場を尊重し、自分の考えを広げることができました。」

実践⑤　豊殿小学校　寺澤信孝

子どもたちが道徳の時間で考えを揺さぶられるような展開を目指して

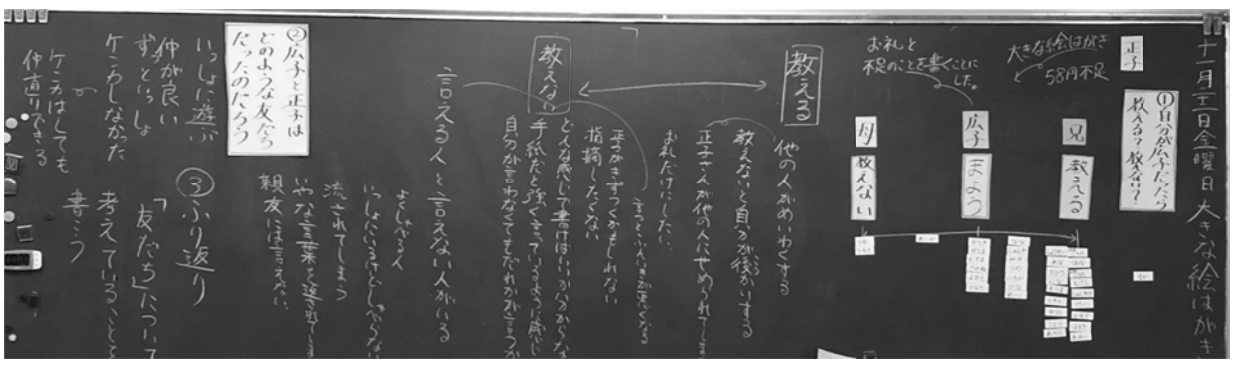
１実践より成果と課題

①「遠足とカワセミ」

心のものさしで鬼ごっこ、カワセミを見に行くを両極にしクラス内の心の位置を黒板に示した。自分と同じ位置には何人いるのか、その人はどのような理由でその位置を選んだのか、自分と遠い位置を選んだ人はなぜその位置を選んだのか…考えを聞くことが楽しみになるような展開を仕組んだ。

成果：自分と同じ心の位置でもちがう理由で考えられるという発見、対極や中道で考える人もいるという発見、いくつもの発見が心のものさしではある。校内で縦割り班での全校遠足を実施した後に取り扱ったこともあり自分の班を想起しながら取り組む児童が多かった。

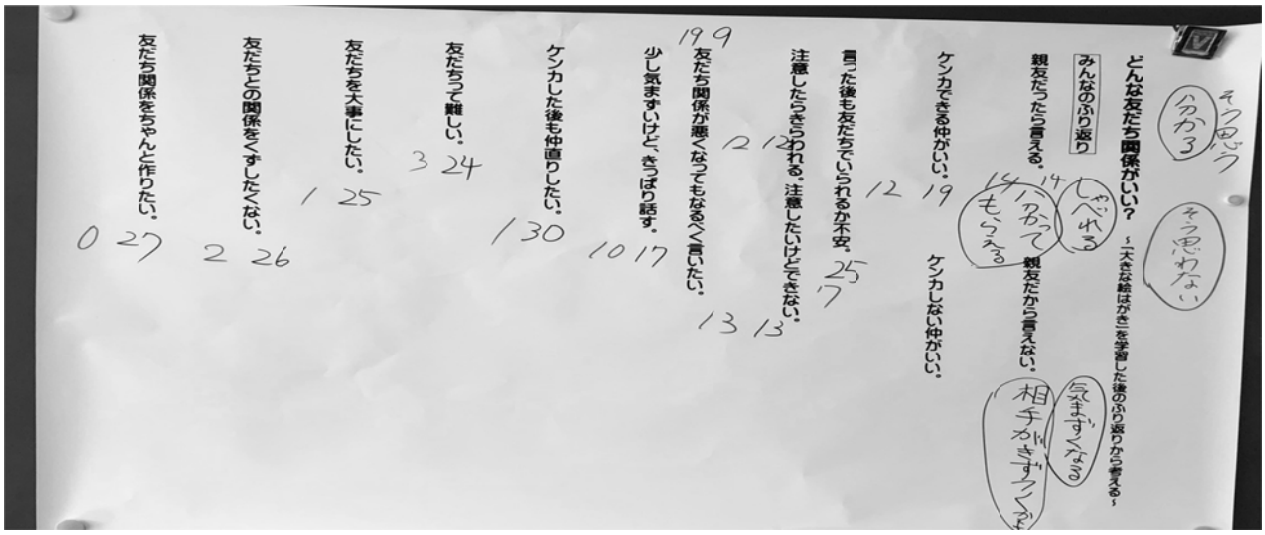
課題：心のものさしは魅力的だが、扱うときに時間を多く費やしてしまう。発問を精査し４５分間で振り返りの発表まで行きつくようにしたい。



②「大きな絵はがき」

２時間扱いとした。第１時では心のものさしで教える、教えないを両極にしクラス内の心の位置を黒板に示した。それぞれの位置からの意見をまとめて「友だちにも『言える友だち、言えない友だち』がいる」ことが浮かび上がってきたため、どんな友だちなら言えるのか、自分は友だち関係をどのような関係ととらえているのか考えを書くことにした。第２時では前時の振り返りから友だち関係についての考えを箇条書きしたものを学習カードで配り、共感できるもの、共感できないもので分け、挙手をしてもらいクラスの実態を明らかにした。数に大差ないものを中心に扱い考えを出し合った。

成果:「カワセミ」での反省を踏まえて、自分の生活の振り返りの時間を短くし、資料に早い時間に入った。



そのため、心のものさしから考えを引き出すことに留まらず、『言える友だち、言えない友だち』へ切り込むことができた。

課題：第２時では子どもたちの振り返りを教材として扱ったが、身近すぎて具体例が出しにくかったのかなかなか切り込む意見が出なかった。熱い意見の交換を期待した教師と子どもたちとで温度差があった。教材は子どもの意識に即して扱いたい。

③「ぼくらだってオーケストラ」

今まではじめに自分の生活を振り返るような活動を仕組んでいたが、その後に扱う資料の内容と逸れる展開になることもあったために、このときは、①資料の内容確認②資料から考える③自分の生活を振り返って考えるように活動の順番を入れ替えた。なお、この資料は葛藤するものではないため、心のものさしは使用しなかった。

成果：資料から登場人物の気持ちの変容を確認し、「友だちの言動が自分に自信を与えてくれることがあるんだ」と押さえることで、子どもたちの考える視点を与えることができた。その後に「そういうことは今までありましたか。」と発問することで「あった。実は…」「ない。」「でも、この言い方だと腹が立って素直になれない。」など考えを広げることができた。自分のことを振り返った後に授業の振り返りの時間になることで子どもたちは授業の最後に自分のことを多く書いていた。

課題：資料のような実体験が「ない。」と答えた子どもでも「これからあったらこんな風にできるかな。してみたいな。」と思えるような語り合いの時間と場が展開できるように発問を精査していきたい。

２評価について

①～③の学習カードの振り返りの記述から評価を考えたい。

A児①「どちらかを選べ」というのはなんか気まずいから、ルールがあったらそれを優先して、それがなければやらなきゃいけないことを優先する。

②間違いを指摘されたら「へえ、そうなんだ。」と言って否定しないように気を付ける。

③友だちに教えてもらうと私の場合は自信がつくときとつかないときがあるから、なるべく自信を持っておいたほうがいいと思いました。

→A児は常に自分ごととして考えている。また、「私の場合は」と友だちの考えと比べて自分のことを考え

られている。

B児①たけしとおさむがなかよくおにごっこできていて良かった。

②自分が間違っていれば教えてもらいたい。教えてもらったときはありがとうと言いたい。

③てつおはなつみに教えてもらって自信がついてふけるようになった。やっぱり人に教えたり教えてもらったりすることはとても大切だと思います。

→B 児は①では自分ごととして考えられていなかったが、②、③では資料もふまえて、自分はどうしたいか、どう考えているかまで考えられるようになってきた。③では友だちの意見もふまえて「やっぱり」と考えに自信がついたようであった。

C児①なやんだときは優先順位を考えて決める。

②ミスをしたら積極的に謝りたい。なるべく先生を通さずに自分の力でケンカを解決し、仲直りしたい。

③教えてもらったときは、少しはとまどうかもしれないけど、自分のために教えてくれているから「ありがとう」と言いたい。

→C 児は自分本位で考えることが多く、日常の中でもトラブルになり自分で解決できずに相談しにくることが頻繁にあった。③では自分の気持ちを書きながらも、相手も自分のことを考えてくれているということまで考えられるようになってきている。

3　実践の振り返り

子どもが「え～、何で？」「ぼくだったら…」「でも…」「やっぱり…」など自分の心を揺さぶりながら考える姿は道徳の授業で多くみることができる。自分と相手はちがう人間だから、考え方もちがう。だからそれがぶつかってトラブルになることもある。でも、そのときにそれぞれの考えを聞き合って認め合うことができるように、資料や友だちの考えから自分の心を揺さぶれるように仕組んでいきたい。

六　研究のまとめと課題

1　本年度の活動の内容と反省

（1）委員会の内容について

・委員会に、東信教育事務所の羽生篤史指導主事をお招きし、「特別の教科 道徳」の内容やその指導方法・評価について研修を行った。今年度から完全実施された道徳科について基本的な考え方を学べたことは、大変有意義であった。

（2）教育課程研究協議会の午後の部の運営について

・教育課程研究協議会の午後の部において、小中の教科書に共有して載っている「はしの上のオオカミ」「泣いた赤鬼」「手品師」の３つの教材について教材研究を行った。子どもの発達段階によって資料の扱いや発問が違ってくること、またどのような子どもの姿を認め評価していくかを意見交換することができた。

2　残された課題と来年度への要望

・引き続き、教育課程午後の部の運営を中心とした計画を立てていきたい。

・年間行事の中での道徳の時間の確保や、教材教具の工夫、評価時期の検討など日ごろの指導の中で出てくる問題について考えていきたい。

七　令和元年度　道徳学習指導研究委員会　委員名簿

小林政徳（推進係　和小学校長）　倉科宗和（委員長　第二中学校）北村信（副委員長　菅平小学校）
加藤昌治（東部中学校）　山﨑豪介（南小学校）　寺澤信孝（豊殿小学校）